

# 昭和の戦争と桶川

展示期間

平成29年8月5日（日）～9月3日（日）



## I 戦時に向かう桶川

この写真は、昭和4年（1929）4月に撮影された荒川河川改修川田谷工場の写真です。蒸気機関車にけん引された大型の掘削機とともに誇らしげな男たちの姿が写っています。

写真の裏には、次のように記されています。

「日賃一円弐十銭人夫近藤金作」

この工事は、金融恐慌による不景気を乗り切るために、田中義一内閣の大蔵大臣高橋是清の下で、公債発行による経済対策の一環として行われたものでした。不況の中、桶川の人々も数多く参加し、賃金を得たと伝えられています。

一方、昭和6年（1931）の満州事変を経て、昭和11年（1936）にいわゆる二・二六事件がおこり、高橋是清は暗殺されてしまいます。

以後、経済的苦境を脱しようとする日本は、大陸への進出を本格化し、昭和12年（1937）には日中戦争が始まります。昭和20年（1945）8月15日の終戦まで、昭和の日本は長い戦時に入っていきます。

## 桶川市歴史民俗資料館

桶川市大字川田谷4405-4 川田谷生涯学習センター内

Tel 048-786-4030 E-mail rekishi@city.okegawa.lg.jp

## 1. 旧熊谷陸軍飛行学校

桶川市の西端、現在、ホンダエアポートがある荒川の河川敷を望む若宮台と呼ばれる高台に、昭和の戦争の記憶を伝える「旧熊谷陸軍飛行学校桶川分教場建物」が残されています。

旧陸軍飛行学校として使用されていた建物群が現存する希少性の高い歴史的遺産として、平成28年2月29日には、守衛棟・車庫棟・兵舎棟・便所棟・弾薬庫の5棟が、桶川市指定文化財（有形文化財 建造物）となりました。

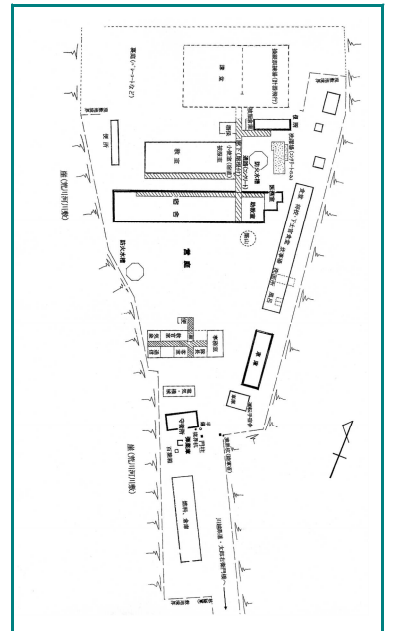
熊谷陸軍飛行学校桶川分教場は、昭和10年（1935）12月に開校した熊谷陸軍飛行学校の分教場として、昭和12年（1937）6月、埼玉県北足立郡川田谷村に開校しました。

ここでは、少年飛行兵（少飛）、学徒出陣の特別操縦見習士官（特操）などの飛行機操縦の基本教育が行われ、20期余り、推定1,500～1,600名の飛行兵を養成し、戦地に送り出しました。

昭和18年（1943）9月に卒業した小飛第12期生は45名中18名が、昭和19年（1944）3月卒業の特操第1期生は80余名中20名近くが戦死しています。

昭和20年（1945）2月、陸軍航空教育部隊の改編に伴い、熊谷陸軍飛行学校が廃されたことを受けて、分教場としての役割を終えました。

その後、特別攻撃隊の訓練にも使われ、昭和20年4月5日に、沖縄に向かう陸軍特別攻撃隊第79振武隊がここから発進しています。



建物配置図



兵舎棟

## 2. 少年と空へのあこがれ

『少年倶楽部』は、大正3年（1914）に創刊され、昭和11年（1936）には75万部の発行部数を誇った戦前の大衆文化を代表する少年雑誌でした。

展示資料は、昭和12年（1937）の夏休み大愉快号であり、付録のほか、紙飛行機の作り方の図解があり、当時の少年たちの飛行機によせる思いが伝わってきます。

付録のペーパークラフトの「神風号」は、試作軍用機の払い下げを受けた朝日新聞の社有機で、この年の4月に、イギリス国王の戴冠祝賀に向い、立川飛行場から لندنまでの間15,357kmを94時間17分56秒（実飛行時間51時間余）で飛ぶという快挙をなしとげました。

国産の飛行機が、日本人パイロットの操縦で記録を達成したことから、国民は熱狂し、少年たちに空へのあこがれを呼び起こした名機として知られています。

昭和12年、日中戦争が始まった後、少年雑誌も軍の検閲を受けるようになり、その記事も戦争と関連するものが多くなります。

少年たちの空へのあこがれは、やがて、少年飛行兵や特別操縦見習士官への志願へとつながっていくのでしょうか。



『少年倶楽部』昭和12年



『少年倶楽部』付録 神風号

## 3. 熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の日々

熊谷陸軍飛行学校桶川分教場がもっとも多く多くの学生を受け入れていた昭和18年から19年にかけて、伍井芳夫（いついよしお）中尉は、教官として飛行学校を差配していました。伍井中尉は、下士官時代から桶川分教場の教官を務め、温厚、誠実な教官として、多くの出身者の記憶に残っています。ここに掲げた写真は、ご家族に伝えられた伍井氏の写真帖によるものです。

昭和18年から始まる特別操縦見習士官制度においては、熊谷陸軍飛行学校が主に学徒を受入れました。募集宣伝のために朝日新聞社から刊行された『写真報道 学鷲』には、桶川分教場で撮影された写真が掲載されており、伍井氏の写真帖の写真も同社のカメラマンが撮影したものと伝えられています。



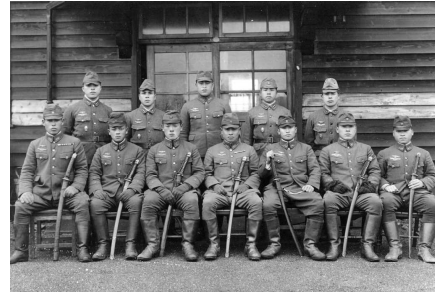
『写真報道 学鷲』昭和19年

伍井氏は、明治45年（1912）7月に加須市（旧大利根町豊野）に生まれ、旧制不動岡中学卒業後に航空兵を志願し、航空士官学校を経て熊谷陸軍飛行学校の教官となり、陸軍の操縦教育の分野で重きをなしていました。



九五式一型練習機乙型（通称 赤とんぼ）

昭和20年に至り、満32歳にして、園子夫人と3人の子供を残して、第23振武特別攻撃隊隊長として3月27日に栃木県壬生飛行場を飛び立ち、家族の暮らす桶川町上空を経て鹿児島県知覧に向かいました。そして、4月1日に沖縄の海に出撃されています。



出撃前にする伍井大尉と第23振武隊の隊員たち

## II 兵士の肖像

戦前においては、大日本帝国憲法のもとで国民皆兵の理念にしたがい、すべての国民は兵役の義務を負っていました。

### 1. 前山定吉氏と司令官の外被（コート）

この外被を伝えた前山氏は、昭和17年（1942）に召集され、ひとりの兵士として中国各地を転戦し、昭和21年（1946）に復員しています。

前山氏は、交戦中に背中を負傷して前線から退かざるを得ない時、マラリアにもかかっていた身体をいたわるようにと、この外被を奉仕していた上官からいただいたのだそうです。

この外被には陸軍大将の階級章が付いています。

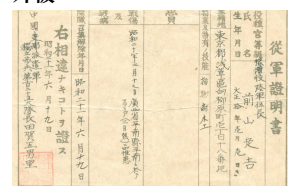
最高位の軍人と一兵士の交流を物語るこの外被は、戦場にあっても人命を尊重する営みがあったことを伝える貴重な資料です。

終戦時、中国戦線には105万人の将兵がいたと記録されています。現地の司令官は、中国の国民政府の信頼を得て、兵士の帰還に尽力したと伝えられています。

中国廣西省（現在 広西チワン族自治区）で終戦をむかえた前山氏は、上海を出航して鹿児島港に到着し、上陸した昭和21年6月19日に中国派遣軍の名において召集解除となった従軍証明書と、この外被をもって帰還をとげました。



外被



従軍証明書

### 2. 小川徳治氏と軍装品

これらの資料は、川田谷の小川家から寄贈を受けたものです。大正9年（1920）に川田谷村で生まれた小川徳治氏は、昭和15年（1940）に近衛師団に入隊しました。その後、中国湖北省を経て、昭和17年（1942）11月に激戦地であったブーゲンビル島に上陸し、終戦を迎えています。

小川氏は、昭和21年（1946）2月22日に、無事、故郷に復員を遂げています。

展示資料は、復員時に小川氏が身につけていた軍装品です。兵士の姿を伝える軍服や背囊（はいのう）と、錠剤やクレオソート丸など、兵士の暮らしを知る携帯品が伝えられています。

小川氏は、戦後も、これらの軍装品を大切に手入れしていたそうです。



小川徳治氏の出征 樋詰氷川神社



略帽と軍衣



背囊（大正6年製）



携行薬  
クレオソート丸 錠剤

### Ⅲ 戦時の暮らし

昭和12年（1937）7月に日中戦争が始まり、同年9月、近衛内閣は「国民精神総動員」を政策にかかげ、続いて昭和13年7月には「国家総動員法」が成立し、戦時体制が形作られ、すべてにおいて軍需が優先し、民需はぎりぎりまで切り詰められていきました。

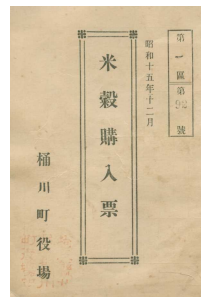
#### 1. 戦時の暮らし

太平洋戦争が始まる直前の昭和16年（1941）4月1日からは、主食の配給制度が始まり、酒、木炭、衣料などの生活必需品もこれに続きました。「贅沢は敵だ!」「欲しがりません勝つまでは」「全てを戦争へ」などの標語がつくられ、国民は、戦争への協力を求められていきました。

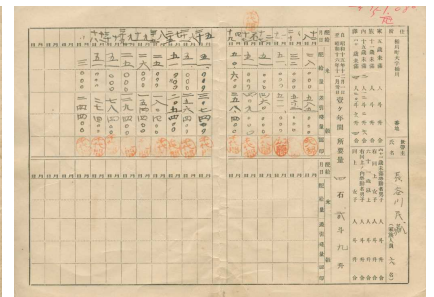
さらに、徴兵によって成人男性は戦地におもむき、女性や学生たちが、いわゆる「銃後の守り」を担うことになり、労働や防空などの負担も増していきました。



防空訓練（桶川町）



米穀購入票



『主婦の友』昭和17年12月号



国民服は、太平洋戦争が激化し、物資の欠乏や国民の動員、そして、空襲の始まりとともに、急激に普及していきました。女性がまとったモンペや防空頭巾などは、当時の婦人雑誌に作り方が紹介され、女性が自ら縫い上げて身につけたものです。

桶川市内でも、国民服を着た男性、モンペに防空頭巾を着けた女性が、防空訓練にあたる姿の写真が残されています。

#### 2. 皇国第一八八八工場

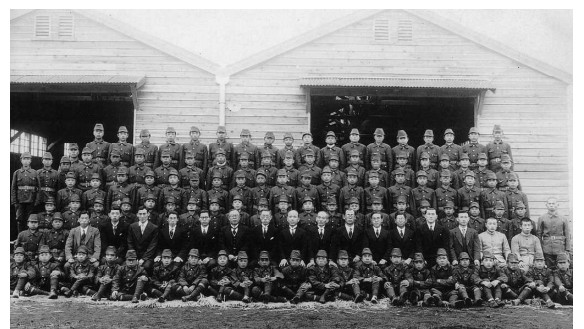
現在は商業施設や住宅団地となっている桶川駅の西側は、昭和56年まで三井精機株式会社桶川製作所の敷地でした。

この工場は、太平洋戦争開戦の前年、昭和15年（1940）に三井工作機株式会社桶川製作所として設立され、昭和20年8月15日の終戦まで「皇国第一八八八工場」として軍需生産の一翼を担っていました。

勤労課長兼厚生課長であった石亀繁太郎氏は、戦時中のできごとを日誌に記し、戦後、昭和63年（1988）に『皇国第一八八八工場』として出版されています。この著書により、戦時中の工場の様子を知ることができます。

桶川製作所では、設立時から少年工を採用し、工場内には国民学校に続く教育機関である青年学校が設置されていました。

昭和19年の年末において、桶川製作所で働く人々は3,545名に達していました。また、工場からは520名の人々が出征しており、勤労者の不足を女子挺身隊や熊谷中学（現在の県立熊谷高校）などからの動員学徒が補い、生産を支えていました。



工場に付属する青年学校に入校した少年工



昭和18.7.8 大詔奉戴日 皇長訓示  
所長訓話 昭和18年7月8日